

人生を決めた〈出会い〉

木岡 伸夫

哲学との〈出会い〉

最初の東京五輪が開催された一九六四年、東大寺学園中学校第五期生として入学したその日、私を待っていたのは、生涯の師との〈出会い〉である。忘れもしない——「僕は今日から、君たちをジエントルマンとして接していきます」との一言。それが、クラス担任池内健次先生の口から発せられたとき、間違いなく何かが始まつた。その言葉は、かつて先生が学んだ九州久留米の中学校で、担任の先生から新入生に向けて発せられたものと同じだとか。世代を超えて言葉の力が届く瞬間に、そのとき立ち会つたわけである。その後、教室で先生の指導を受けたのは、中二までの二年間。仔細あつて学園を去られてから、今までその幾十倍かの時間、私は師の影を踏み、一人の哲学者として後に続くことを念じて生きてきた。そう申し上げても、過言ではない。

小柄ながら眼光鋭く、発達した大脑を容れる頭の鉢の大きさ……とくれば、そう、「火星人みたいな人」というのが、初対面時の先生の印象だった。京大哲学科で、カントを研究されたという又聞きから、哲学者とはこういう人なのかと感じ入り、憧れを抱いた次第である。小学六年生で漱石の『吾輩は猫である』を読むなど、ませたガキであつた私は、それまで自己流に綴つていた「読書ノート」を、母親に唆されて先生にお見せしたところ、「実際に見事な読書ノートです。頑張つてぜひ続けてください」という丁寧なコメントが、添えられて戻ってきた。その言葉どおりに発奮すれば、早熟の天才とまでは行かずとも、秀才ぐらいにはなれたかもしれない。コツコツ勉強することが苦手で、努力に縁のない怠け者だった私が、先生の後を慕つて同じ大学に、それも現役で合格できたのは、「奇蹟」に近かつたと言わなければならぬ。

「ダメな奴」のために

学園退職後、天理図書館に勤務されるようになつた池内先生の「自宅は、学園前。私の住む生駒から近く、休みの日によくお邪魔してお話を伺つた。昼過ぎの一時頃から夕方、ときに厚かましく夕食までご馳走になつたが、談論風発、話題が尽きることはなかつた。数え切れないお話の中で、私の一生を決定づけた先生の一言がある。それを紹介したい——」と、言うとドラマのようで、面映ゆいが事実である。

こういうことだつた。世の中には、ダメな奴、劣つた者が存在する。そういう者のための哲学を、自分は考えたい、と。正確に再現できないが、およそそういう意味の発言をされた。どうか、そういう考え方があるのか、と劣等コンプレックスに悩む私に、他のどんな学問にもない哲学の崇高な目標が示された。一九六〇年代当時、先生が「ダメな奴」として想定されていたのは、たぶんベトナム戦争で、「優等生」アメリカと戦い続けるベトナ

ム人の姿ではなかつたかと思う。周知のとおり、ベトナム戦争は「劣等生」ベトナム側の勝利に終わった。だが、そこに潜む真実を語る「劣等生の哲学」は、今日まで存在したことがない。というのも、古代ギリシア以来の哲学は、西洋という覇者によつて考案された「優等生の論理」に過ぎないからである。もちろんそんなことが、高校生だつた自分の頭に浮かぶはずはない。ただ先生の提起された問題にどう答えるかが、自分の一生の課題になつたことはたしかだ。私の「人生を決めた〈出会い〉」とは、そのときに先生からいただいたお言葉のことである。

〈出会いの哲学〉へ

本稿の目的は、草創期の東大寺学園において、池内健次先生との〈邂逅〉（思いがけない出会い）が、私にとって何を意味したかをお伝えすることにある。この〈邂逅〉が、その後の人生にどう活かされたかに若干ふれて、結ぶことにしたい。

私は、池内健次という人格を介して、哲学と出会つた。それから半世紀を超えるこの学問との付き合いの中で、最後のテーマは〈出会い〉である。〈出会い〉とは、多分に語弊のある先刻來の言い方によるなら、「優等生」と「劣等生」が向き合うときにも、上下・優劣なしに、たがいを認め合うことである。そういう意味での対等同格の〈出会い〉は、歴史の中で成立したことがない。「他者といかに出会うか」——これは、二〇一二年に脳卒中で倒れたとき、私に残されていた最後のテーマである。その折、余命五年を意識した自分が、幸いにも『邂逅の論理』（春秋社、二〇一七年）を世に送り出すことができたいま、心残りは何もない。

先生は、本稿執筆時点（二月）で八九歳、『鷗尾』発行時には卒寿をお迎えのはず。後進の鏡として、健在であり続けてくださることを願つてやまない。（関西大学文学部名誉教授）